

『農の原理の史的研究 「農学栄えて農業亡ぶ」再考』

(藤原辰史、創元社,2011、¥3,500+税)

2011.2.4 OKAYASU

「資本主義とはいったい何か。これを食と農から考えてみたい、という問題意識が本書の全章につらぬかれている」、もっと具体的にと言われれば、次の問いに置き換えても良いとして著者は「農学は、なぜ農業の死をもたらそうとするのか」(p.31)と発する

「農業と医学は、近代世界の人口爆発をもたらした二大科学だ」(p.8)。実学であるがゆえに、一連の隣接科学を取り込んできた。「その結果農業化学は化学に、農業経済学は経済学に、育種学は分子生物学に、農業機械学は機械学に目的も方法も吸い寄せられつつあり、では、その中心にあった「農の原理」はいったい何なのか、あやふやになっている」「そもそも農学の発展は、食の工業化という性格を免れなかった」(p.9) <「育種学を遺伝子工学と合一」「(農業従事者の)エンジニア化」>

「大規模機械化農業の難しいEUや日本は、農業の多面的側面に税を使いつつある。まずは観光資源、・・・農業はもはや・・・『アトラクション』でもある」(p.12、下線は引用者、以下同様)

「たしかに農業の営みは、農村の風景を作るだけではなく維持もしてきた・・・その価値は・・・計り知れないという」(p.12)

「農業は福祉にも役立つ。それも否定できない。・・・農業とは、まさに土壌も生命も人間も再生できる場所を作ってきたし、これからも作っていけるのである」(p.12)

「だが、農業の多機能化のなかにあって、「農」そのものは、いったいどこへ行ってしまったのだろうか」(p.12)

「農業は工業やサービス産業や情報産業と大きく変わらなくなり、農業本道の価値は分裂、拡散し、輪郭がぼやけてきている」(pp.12-13)「農学が工学化することで、農業も工業化する。さらに、農業が観光資源となり、アトラクションとなり福祉となる・農業の範囲が広がっていく一方で、農業としての統一性を失いつつある」(p.13)

「まだ誰も始めてはいないが再生医療を用いた細胞培養による食品の生産にも、倫理的留保なしに言及されている(MIT『ワイアード』)」(p.13)

「細胞の培養によって動植物を自在に育成できれば、もはや農地も農民も農村も厩舎も不要になる。(こういう)農業は「農業」呼べるのか。違う業種ではないか」(pp.13-14)

「細胞の培養による動植物の生産は、農業にとどめを刺す。各農村は、まるで弥生式土器を作成するような、ノスタルジックな農業体験の観光スポットおよび福祉施設になっても何ら不思議ではない」(p.14)

「また、食に対する面倒な感覚がこれ以上増えていけば、培養肉への気味悪さや携帯点滴によって必須栄養素を血液に送り続けるようなシステムへの心理的障害が消えていくことも、十分にありえる。そうすれば、ついに人間は農耕と料理と、最終的には食から別れを告げることができる」(p.14)

「人類が食事行為を捨て去るとすれば、人類史そのものの終わりである」「農作物が食品と限りなく近くなり、食品が工業製品との距離を失い、口に運ばれることは、人間が人間であることを失わせ、食自体を捨て去ることは動物が動物である条件を失わせる」(p.14)

他方で、8億の人を飢餓から救い、地球の温暖化を食い止めるなど、「人工食物は救世主とさえなりうる」(p.14)

「これは明るい未来ではないか。そうなる起こりうる問題も想像に難くない。①食わずに生きて労働する階層と、②ヴァーチャルに食を味わうだけの階層と、③美味しくて高価な料理を食べられる階層に分断される可能性を考えなくてはならないのである」(pp.14-15、番号は引用者)

『不食と培養食』:

「どちらも『屠殺』や『栽培』を省略している」「ただし、食と農の棄却論か決して侮れない。食と農の廃棄というそれ自体荒唐無稽に見えるヴィジョンは、人類があらゆる束縛、とくにその根源である身体の束縛から自由になりたいと思う欲望の延長線上置かれるからである。」

「食と農というジャンルをいったい人々はこれまで誰に任せてきたか。食と農の担い手に対し、人類はどんな眼差しを向けてきたのか。多くの人たちにとって食と農に関わる作業は誰かに任せたい仕事だったというのが人類史の基調ではないか。だから、人類は、男女差別や人種差別や奴隷制をつくり上げてきたのではなかったか」(p.16)

「農学栄えて農業減ぶ」は、「農学とはそれ自体すでに、農業発展のために進展すればするほど農業を滅却させていくという逆説的な宿命を帯びている、率直に読むべきではないか」(pp.25-26)

「農業従事者の目線に立って、できるだけ苦勞せず、効率的に農業が営めるようにする農学の精神は、それだけでいっそう自然から農業従事者を乖離させていく」(pp.25-26)

「医学が栄えると医療は減ぶのか。神学が栄えると神は減ぶのか。法学が栄えると法は減ぶのか。経済学が栄えると経済は減ぶのか。歴史学が栄えると歴史は減ぶのか。そんなわけではない、と学問の真っ只中にいる学徒は信じがたいが、実は簡単に答えを導きだすことができない」(p.26)

(まあ、哲学的思考はここ<序章>に集約されているとみて良い〜岡安)

私のコメント(と言うほどのものではない)は次頁へ

- ◆ 360 ページ全 8 章
 - 序 章 科学はなぜ農業の死を夢みるのか
 - 第 1 章 夢追い人の農学—チャヤノフと横井時敬の理想郷
 - 第 2 章 八方破れの農学—横井時敬の実学主義
 - 第 3 章 大和民族の農学—橋本傳左衛門の理論と実践
 - 第 4 章 転向者の農学—杉野忠夫の満州と「農業拓殖学」
 - 第 5 章 「血と土」の法学—川島武宣のナチス経験
 - 第 6 章 反骨の実学—吉岡金市による諸科学の統一
 - 終 章 農学思想の瓦礫中で
- ◆ 「農の工業化」問題は 1980 年代に東大生協で話題となったことを思い出した。
 - それから「深化」していることが読み取れる。
 - 農以外の人間と IT や AI との付き合いをどう見るか、に関わる
- ◆ 「経済学が協同組合運動をおかしくした」との自論に通じる展開。
 - 「協同組合は流過程に存在意味がある」との農業経済学者・権威者
- ◆ 「農」と「農業」の悩ましい軋轢とも取れる言及
 - 資本主義経済下の帰着ははっきりした！
 - 「農」の人間的再生。↑↓
 - 社会的経済・連帯経済から「農」は再生可能のか？
- ◆ 「農」と食の安全保障も展望せざるを得ない。
- ◆ とりあえず。その他、もろもろ